

震災後の子どもたち (17)

ゆさぶらわれても地に足つけて

穴井 重行

寿枝のこと

長女寿枝は十八歳になります。下に妹中三、弟中一の三人兄弟です。この春、神戸市立青陽東養護学校を卒業しました。生後三か月でダウン症と宣告され、妻は病院から帰るなり灯もつけない

で、部屋の片すみで寿枝を抱き放心したようにじっとしていました。

涙が頬をつたいどうすることもできなかった。「これからどうすればいい」「なんでやなんでや、自分たちだけが悲しい、苦しい目に遭うんや！」頭の中でそんな言葉がグルグルまわるだけ

でした。そんな思いをしたことがつい昨日の事のようにです。障害児を持つと、自分を責め妻を責め、その先にあるものはややもすると孤立、そして「内」にこもってしまう場合がある。ひとつまちがえれば私たち家族もそうなったかもしれないません。幸いこの十八年間多くのすばらしい人々に巡り会わせていただき、ここまでくる事が出来たのです。あの大震災のなかでも私たち家族は多くの心ある人たちに助けられて今日があるのです。

大震災のあと

一九九五年一月十七日午前五時四十六分、大震災の発生、神戸市民約百五十万人の人々に震災はひにくにも平等にゆさぶりを掛けたのです。亡くなられた多くの方々の冥福を祈ります。自然の力の大きさに比べ人間の無力さ。そしてそこから始まったそれぞれの人生。

私たちへ自然は何を戒めようとしているのか、そこまで考えさせられました。住んでいるマンションは七階でヨコゆれタテゆれ凄まじいゆれの中で一瞬これで終りだと思えました。ゆれが一時おさまり灯りをさがし目にしたものは全てガレキとなった家具でした。次女と長男は子ども部屋の二段ベッドで寝ていて助かり、私と妻と寿枝は狭い部屋で助かったのです。タンスが重なりささえ合ったのです。

大人もおびえます。子どももおびえます。ましてや障害児の寿枝にとってはすさまじい体験でした。「こわいこわい、こわいこわい」の連発でした。その声はほとんど絶叫でした。幼い頃より暗闇を非常に恐がる子でしたので心中ははかりしれない恐怖だったと思います。彼女は母親が抱き締め声を掛けるなか失禁をしていました。また余震です。落ちた食器が大きくハネあがるのです。大

声で次女と長男に「ベッドのふちを持ちじっとしていろ動くなヨ」と言い明るくなるのを待つことにしました。すると寿枝が突然妹の名を呼びだしたのです。「くみちゃんくみちゃん」何度も何度も。「くみこの所へ行きたいんか？」と聞くと、行くと言います。ベッドの方が安全と思いい寿枝を子ども部屋へ移動させました。するととたんに落着きを取りもどしとでもしっかりした声で、

「お父さん、もういいよ。お父さんガンバレ！」と言ったのです。これには私もびっくりしました。兄弟の力でしょうか。夜が明け、外の様子に戦慄を覚えました。安全な場所へ行こうと車を出し小学校へ行きました。校舎の横の道路で車を止め二日間過しました。

この時の食料はパン五枚、タマゴひとパック、肉ひとパック、バターとトウフ一丁、牛乳ひとパック、そしてなんとポリタンク二個に水がたっ

ぷりを入れてあったのでした。水は知人にも分けました。子どもたちに食料を見せ、これで三日間もたす事を話しました。三日すれば心配なく食料はくると思っていました。一日二食、十時頃と五時頃と決め、パンは二人で一枚とし水分は多く取らせた。くいしんぼうの寿枝が食がとでも細くなっていった。夜は非常に寒く月が異様なくらい美しかった。寝れなかった。

二日目、バイクで知人の家をまわり安否を確認に行ったがほとんどが避難して会えなかった。重度障害で一人暮らしの後藤君が気になり彼の自宅へ行った。アパートは傾き戸は開いたままだった。声をかけても返事がない。彼はいなかった。彼はボランテアにいつも来ている女の子にベッドの下から担ぎ出されたと後に聞き安心をした。道一本反対側は火の海でした。悲しくてくやくして涙がとまらなかった。どうしようもなく車にも

どり夜を迎えた。

仲間との助け合い

三日目、学童保育や出合の里を通して私的にもお世話になっている、石本さんが私たちをさがしまわってくれていたのです。「こんな所で寿枝や子どもたちを置いたらあかん！

私の家へおいでヨ」とおこるように言ってもらい、一家でお世話になったのです。その後、これも学童保育を通しての友人である、森末家族や安藤家族と石本さんの友人の方とで石本宅にて合同生活が始まりました。昼間それぞれに活動し、夕方皆で集り大勢で食事をする。この時期に不謹慎かもしれないがそれは実に賑やかな食事でした。これが私にとってこの時期一番の活動源となりま



した。三人の子どもたちもより安全な北区の親戚へ預かってもらいました。

このお家は私の遠い遠い親戚で、寿枝が幼い頃身内にも相談が出来ない時やつらく苦しい時、私たち一家をはげましてくれてあたたかく見まもってくれた家族でした。それがあったからこそ、異常な事態の中で心よく迎えていただき寿枝も素直にお世話になる事が出来たのです。私たち家族が

二週間そこで自宅マンションで、不自由ながらも生活が出来たのも石本さんや北区の矢野家の人たち、また多くの親友のお陰です。この様にして私たちはすこしずつ生活を取りもどしていったのです。

学校再開と子どもたちの再会

学校の再開のニュースは寿枝にとってまちどおしい事でした。しかし再開するまでの校長先生をはじめ職員の方の努力は大変だったと思います。最高時、養護学校への避難者は千五百人の方々がいました。二月二十二日、学校再開。この時避難の方々七百人。障害児たちにはどのように映ったのでしょうか。初日、子どもたちは肩をたたき合っていて再会を喜んだと聞きます。そして、震災後の子どもたちの様子がそれぞれに分かってきたのです。

震災があってもなくても障害児の子どもたちにとって学校は大切な心のよりどころなのです。友がいて先生がいて自分がいる、それを確かめる場所なのです。震災後交通機関がマヒし学校がストップしている事も理解出来ません。学校へ行くと言ってあべれます。親はやむなく駅までつれて行き何時間も線路に立ちこない電車を待ちます。

「ほらこないだろ……」と教えたと聞きました。何日も何日も。また、今回一度は避難所に行ったものの、ほとんどの人が自宅あるいは知人の家または壊れた自宅へ帰ったと言います。避難所では生活パターンが急に変化し、その為、奇声、偏食、パニックと障害児本人にはどうしようもない状態になる。周囲の人たちからは共同生活をたてまえに「障害者である」理解とは別に、親に辛い忠告が多くきたりしたのです。私は避難所にも老人や病気の人たち、さらに障害児(者)にも配慮

した、避難所があつて当然と切に望みます。

M君とカウンセラー

八年前より私はボランティアで、障害者の人たちが働く場を作ろうと始まつた自然食品の店の手伝いをさせてもらっています。私の仕事は勤務終了後、ステーションまで商品を取りに行き、注文をもらつた各家庭へ配達をする事です。現在灘区を担当しています。その配達にいつもM君をつけて行きます。彼は二十三歳になります。彼は自分の身の回りの事や物事の判断はかなり高度に出来ます。しかし、ボタンの掛けちがい現象と言われるような、ちょっとしたミスから一瞬にしてパニックになり、出口を見失ひ自分では解決できません。彼独特の「こだわり」の世界へ入ってしまいます。何回も何回も同じ質問をくりかえし他人に確かめるのです。そしてやっと自分が落着きを取

りもどすのです。長い長い時間がかかるのです。そんな彼も今回の大震災でパニックになってしまいました。幸い、彼の自宅は被害が少なく軽度でした。しかし心に受けた衝撃は大きかったと思います。

そんな彼に私は配達の途中、「M君ヨー今度の震災で一番しんどかったことはなんやったー」と聞きました。すると彼の口からこんな答えが返ってきたのです。「僕ネー今度の震災で一番しんどかった事は母さんが頭の手術をして入院したことがやっぱり心ぼそかったヨー」。その後思い出した様に、「そうそう、もうひとつあるねん。それはネ、僕がパニックになって相談所へカウンセリングを受けに行つてる時やネン。ホンマあれはしんどかったですヨー」と言います。最初私はバスや電車で行く道のりかと思つたのですが、よくよく話を聞いて見るとそうではなかつたのです。彼

がカウンセラーの方に相談をする。ところがこだわり家の彼としてはいつもの様に何回も何回も同じ質問をくりかえす。カウンセラーも何回もくりかえすもんだから、ついつい分かった分かった、また次においでと帰される。彼はまた相談所へ行く。カウンセラーもついつい前と同じ対応をする。彼も何回も何回も質問をするのです。あまりしつこいのでカウンセラーの人ももう帰らないとここへ来てはいけないヨ！ 皆忙しいだからと言われたようなのです。

このカウンセラーの方の言うとおりにんですが、どっこい実はそうではなかったのです。M君にとってカウンセリングとは何回も行って同じ質問をくりかえすことであり、答えを聞く事ではなかったのです。だから彼はカウンセリングの人にもうこなくていいよと言われるのがとてもこわかったのです。彼いわく、「穴井さんだから（言

うけどネ）、僕ネその人をおこらせないようにカウンセリングを受けたんですヨ。そりゃあもうとてもとても気をつかって言葉も選んで質問をしたらんですヨ。それが震災後一番しんどかったですヨ！……。いったいどちらがカウンセリングやら。皆さんはどう思われますか？……

（高羽風の子学童保育所運営委員）

